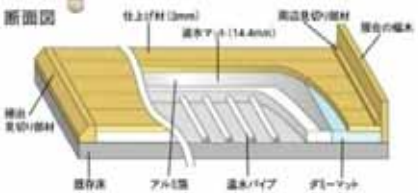
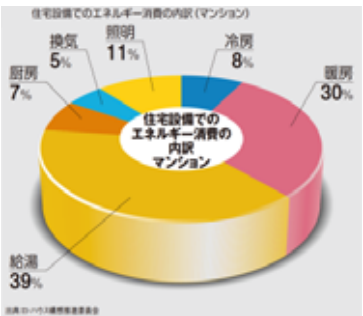


最終更新日 H24.10.24
改修技術 No. 12501003

性能分野	環境・省エネルギー性能		
大分類	設備機器の節エネ・高効率化		
中分類	高効率化		
技術の名称	冷暖房機器の高効率化		
改修技術の概要	<p><b>【改修工事の主な内容】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭における機器別の消費電力量をみるとエアコンが給湯に次いで大きく、全体の約 1/4 を占めるとされている。また、技術の進歩により 2008 年型のエアコンと 1995 年型を比較すると、期間消費電力量が 40%以上小さくなり省エネ化が進展している。エアコンの更新時期は 10～15 年程度が目安となる。</li> <li>・新たに設置した床暖房パネルにヒートポンプ式給湯器、潜熱回収式ガス給湯器の温水を循環利用することにより快適な床暖房が可能となる。エアコンの暖房と併用して運転するのが一般的。</li> </ul> <p><small>&lt; 出典：「既存マンション省エネ改修のご提案」日本建材・住宅設備産業協会 &gt;</small></p>		
	<p><b>【各設備の高効率化の特徴】</b></p> <p>高効率エアコンに交換する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・熱交換面積が広く、インバータ制御の高効率モータを使用し大幅な省エネ化を可能としている。</li> <li>・高効率給湯器の温水を床暖房に採用する。(給湯機器参照)</li> <li>・既存床の上から施工できるカバー工法もある。解体工事が不要なため工期が短くなる。</li> <li>・床の温度を測るセンサーが設置されたタイプは、暖めすぎの無駄を省いた省エネ運転が可能。</li> <li>・温水床暖房は均一な室内温度と輻射熱により体を暖めるため低めの室温でも満足が得られる。</li> </ul>		
共同住宅のタイプごとの技術の適用	技術の種類	調査・診断技術 改修技術（劣化を補修する技術 性能を向上させる技術）	
	共同住宅のタイプごとの適用可能性	S55 年以前供給 中層階段室・壁式(総プロA1)	使われる可能性が相当ある
		S55 年以前供給 高層・ラーメン(総プロA2)	使われる可能性が相当ある
		S56～H2 年供給(総プロB)	使われる可能性が相当ある
		H3～12 年供給(総プロC)	使われる可能性が相当ある
		H13 年以降供給(総プロD)	使われる可能性が相当ある
		(補足)	



< 出典：東京ガス(株) >

常にセットで利用される技術		<同時に適用する技術> 給湯機器の高効率化(潜熱回収式ガス給湯器)(12501004) 給湯機器の高効率化(ヒートポンプ式給湯器)(12501005)
技術が適用される建物の部位		共用部分 ( 躯体・外壁 屋根 建具 設備・配管等 その他共用部 ) 専有部分 ( 設備・配管 その他専用部分 ) 〔 設置・運営等で建築基準法以外に注意すべき主な法令がある設備 ( ) 注意すべき主な法令( ) 〕
団地で適用した場合のメリット		住棟まわりの土地が利用できること(仮設以外)( ) まとまった土地が利用できること(仮設以外)( ) 住宅の数が多く密度が高い( ) 特定の設備があること( )
足場の設置が必要		必要 不要 ( )
工事による居住者への影響	数日以上居住できない住戸が発生	該当 非該当 ( )
	一時的な影響が発生	断水などライフラインが一時的に利用不可 高効率エアコンに交換 : 振動 騒音 粉塵 臭気 高効率給湯器の温水を床暖房に採用: 振動 騒音 粉塵 臭気 その他専有部分又は専用使用部分に対する制限 (一時的に施工する部屋の利用不可 )
	工事後に続く影響が発生	専有部分又は専用使用部分の使用に対する制限( ) 日照・採光等への影響( )
当該技術が利用される工事		計画修繕工事( 劣化の補修 性能の向上 ) 耐震改修工事( 耐震性の向上 他の性能の向上 )
技術的境界		
参考資料	技術情報	
	価格情報	・「マンション RE2010」(一財)経済調査会